

TAKE FREE

TAKATENJIN CASTLE
高天神城読本

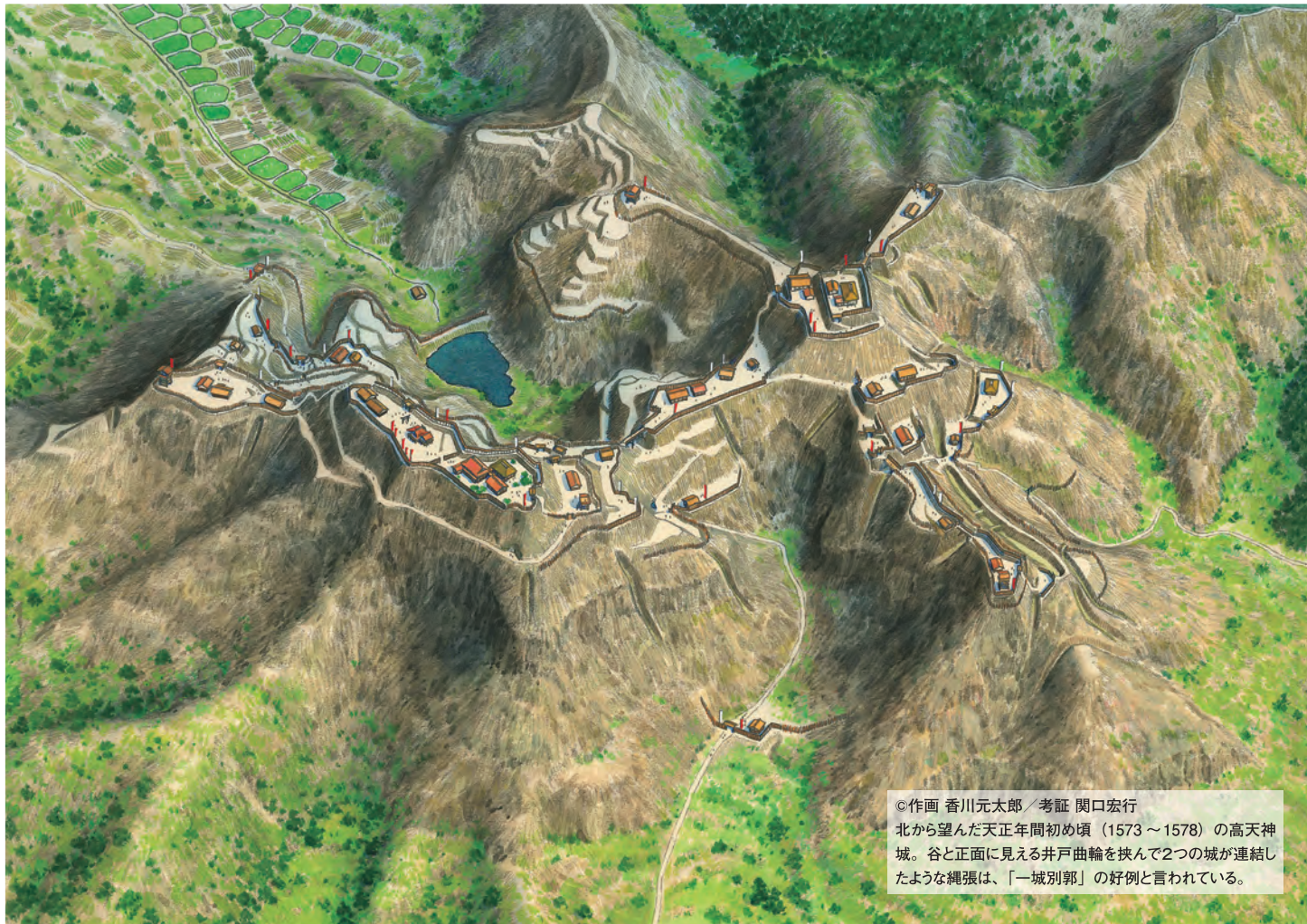
TALES OF
TAKATENJIN CASTLE

高天神城の歩き方ガイド

IT IS STILL A FORMIDABLE NATURAL FORTRESS.

CULTURAL ASSETS
IN KAKEGAWA

vol. 01



©作画 香川元太郎 / 考証 関口宏行
北から望んだ天正年間初め頃（1573～1578）の高天神城。谷と正面に見える井戸曲輪を挟んで2つの城が連結したような縄張は、「一城別郭」の好例と言われている。

TAKATENJIN CASTLE X YOKOSUKA CASTLE



【円内は家康が築城した範囲】

「遠州横須賀惣絵図（部分）」個人蔵
17世紀後半頃の横須賀城とその周辺を描いた絵図。城の西に「入江池」、南に「内海」と呼ばれる潟湖があり、城はその潟湖を天然の堀として利用するように築かれていました。また、「内海」を弁財天川から遠州灘に至る運河として機能させ、さらに河口付近には横須賀湊が整備され、戦国時代末期から江戸時代初め頃は遠州灘の航行時の中継基地として栄えていました。
ところが、周辺河川からの経年の土砂流入と、宝永4年（1707）に発生した宝永地震に伴う地盤隆起により潟湖が消滅、やがて陸地化、現在目にする地形になりました。

高天神城の戦いにおける横須賀城

横須賀城の築城時期については諸説あり、天正二年（一五七四）から天正八年（一五八〇）頃と云われています。まずは奪還の拠点となる馬伏塚城（袋井市）を改修し、さらにその南東に岡崎の城山（袋井市）を築城しました。往時の馬伏塚城や岡崎の城山の周囲には低湿地や潟湖が広がっており、小舟が往来する水上交通網が発達していました。さらに南には浅羽湊、後に横須賀城が築かれる横須賀湊があり、家康は城郭と湊を結ぶ水上交通網による兵士ならびに物資の大量輸送ルートの構築に着手しました。
横須賀城の選地は、最初から現在の地とされたわけではなく、石津の八幡山（石津八幡神社）や、後の横須賀城主大須賀氏ならびに本多氏の菩提寺である撰要寺が建立される丘陵も候補地となっていたとされています。
最終的に松尾山とその周辺に築城が決まり、家康自らが縄張りをした最初の城郭とされます。後の天下人となる家康が最初に本格的な築城にかかった城郭として、浜松城と並び横須賀城も出世城とされる所以です。完成後も家康と信濃はたびたび来城しており、高天神城奪還に対する並々ならぬ決意と執念がうかがえます。
築城当初の城域は、松尾山を中心とした本丸と北の丸を含む小高い丘陵部のみでした。松尾山の背後には巨大な空堀が設けられており、戦国期の遺構、すなわち家康時代の遺構と評価されます。

WALK IN TAKATENJIN CASTLE

高天神城の歩き方



【おすすめの服装】

- 帽子 ■長袖シャツ・上着 ■インナーシャツ
- パンツ（ジーンズでも可） ■運動靴（スニーカーok）

高天神城を見学する時のアドバイス

搦手門Pと追手門Pの二か所の駐車場があり、初めての見学の場合は、広い駐車場のある搦手門Pから登るのがおすすめです。どちらも10分程度で東西の峰を繋ぐ中央の「井戸曲輪」に辿り着きます。

見学路は整備されていますが、城内各所に急な石段や当時のままの未舗装の山の道、木の根などがむき出しの難所も多くあります。万一の場合の転倒や、蚊や蜂対策として長そで長ズボンと帽子、歩きやすい運動靴などの服装が必要です。ザックやショルダーバッグなど、両腕を使えるような装備がおすすめです。

また、高天神城は険しい断崖上に造られ、樹木が繁茂しています。見学路を外れたり、夕刻（特に日照時間が短い時期）や、雨天時は転落・道迷いの恐れもあり危険です。早めの時刻での安全に配慮した見学を心がけましょう。

ACCESS TO TAKATENJIN CASTLE

高天神城へのアクセス

【所在地】静岡県掛川市上土方嶺向

- JR掛川駅から、しずてつジャストライン掛川大東浜岡線で「土方」下車、搦手口まで徒歩15分
- 東名掛川 I.C から県道38号を南進10km

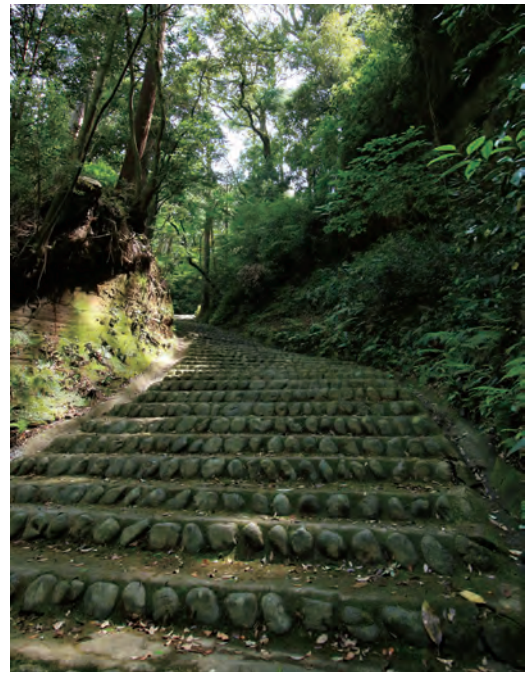
新幹線	名古屋	掛川	東京
	○	●	○
	60分	105分	
JR東海道線	浜松	掛川	静岡
	○	●	○
	25分	45分	
東名高速道路	名古屋	掛川I.C	東京
	○	●	○
	87分	150分	
新東名高速道路	名古屋	森掛川I.C	東京
	○	●	○
	75分	145分	



高天神城の情報はホームページでも紹介しています。

URL <https://takatenjinjyo.com>





© 作画・考証 香川元太郎
 天正六(一五七八)年(一五七八)の「高天神城」三河物語によれば、高天神城の四方に堀がめぐらされ土塁が築かれたとされる。さらに機重にも柵が設けられ、一間(約1.8m)毎に番兵が配置されたこととされる。まさに人間の鎖とも呼べる鉄壁な守りにより、城外から城内への兵糧・武器の搬入は不可能だったであろう。



TALES OF
 TAKATENJIN CASTLE

高天神城の戦いについて

「プロローグ」

鬱蒼とした静寂な杜の中、「兵どもが夢の跡」を彷彿させる高天神城。戦国時代、武田氏と徳川氏による激しい争奪戦が繰り返されました。

「高天神城を制す者は遠江を制す」と謳われましたが、高天神城は東海道から分岐する塩の道(信州街道)の終末に位置し、城からさらに西へは沿岸の道しかありません。また、城の南の遠州灘にはかつて浜野浦と呼ばれる湊がありましたが、高天神城からはそれなりの距離がありました。

はたして、高天神城は争奪にあたいする程の城郭だったのでしょうか。なぜ、激しい争奪戦が繰り返されたのでしょうか。争奪戦の原因と背景、ならびに戦いの経過をみてみましょう。

高天神城の歩き方 1

A	B
C	
D	

【A. 搦手門付近】城の表口である大手門(搦手門)に対し城の裏口を搦手と呼び、戦国時代にはここに門が配置されていた。【B. 搦手からの登城路】登城路幅が現在に比べ戦国時代は狭かったが、急峻であることは変わらない。【C. 搦手からの登城路】登城路は急峻であることにくわえ、谷間をつづら状に折れ曲がることにより行く手の視界が遮られる。【D. 搦手から望む急崖】登城途中、頭上に目をやれば、鬱蒼とした中に切り立った急崖が視界に迫る。この急崖を目にした攻め手は、戦意を喪失したことだろう。



天正二年 1574年
 高天神城を巡る攻防 | chapter 1

天正2年(1574)
 武田勝頼による
 高天神城攻め

二 天正二年以前の
 武田信玄による高天神城攻めとは

永禄三年(一五六〇)桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に討たれると、遠江における今川勢力はしだいに衰退、それまで今川方にあった国衆の今川氏からの離反が相次ぎました。それを好機とみた武田・徳川両氏は、今川領への侵攻を開始することになります。まずは、両氏の遠江制覇の上での重要な駒として浮上したのが高天神城でした。今川方の時の城主

を目標と定めました。武田氏の兵站※拠点である諏訪原城に加え、海岸沿いの小山城(吉田町)と滝境城・相良城(牧之原市)を整備し兵站ルートを補強することで、武田氏にとって決戦に有利な高天神城を攻撃目標としたのです。一方の徳川氏にとって遠江における領土は、浜松城と中東遠(掛川市・袋井市)を除けば、ほぼ武田勢に占領されていたことから、これ以上の武田氏による占領は許されず、何としても高天神城を死守しなければなりません。仮に、武田氏により高天神城が攻撃されれば、後詰※として応戦しなければならぬ状況にありました。

武田・徳川の両氏にとって、遠江の覇権をめぐっては、どうしても手に入れなければならない重要な駒、それが高天神城であり、武田・徳川氏の決戦の舞台となったのです。

天正二年(一五七四)五月三日、武田軍は二万五千(二万とも)の大軍を率いて甲府を發つと、瞬く間に高天神城は武田の大軍に包圍されてしまします。守る小笠原氏助率いる徳川軍は、自軍のみでの防戦は困難と判断、同盟関係にあった織田信長に出馬を要請、織田・徳川の連合による後詰を画策しました。

武田軍は城の包圍とともに猛攻をくり返し、5月下旬には本丸・二の丸・三の丸をはじめ

小笠原氏興・氏助(後に信興に改名)父子が徳川方に付き、高天神城はまずは徳川方の城となりました。

今川氏の滅亡後、武田信玄は駿河をめぐり北条氏との抗争に明け暮れていました。抗争の舞台となっていた深沢城(御殿場市)を攻略し東の防御を固めると、侵攻の矛先を遠江に向けました。信玄自ら二万の大軍を率いて遠江に入り、塩買坂(御前崎市)に布陣、高天神城の城主小笠原氏助を降伏に追い込んだとされます(その後、徳川方へ復帰します)。この信玄による高天神城攻めについて、近年の研究では元龜二年(一五七二)の三河・遠江侵攻の存在を否定する見解が多く、また、翌三年の遠江侵攻の様相についても議論が続いています。

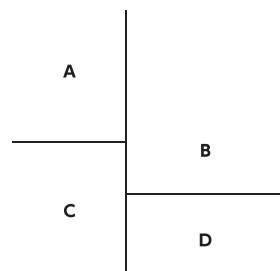
二 武田勝頼の逆襲

上杉謙信が一目置き、北条氏康・織田信長・徳川家康の名だたる戦国大名が恐れた、猛将武田信玄が元龜四年(一五七三)に急逝しました。信玄亡き後の勝頼にとって、信玄がなし得なかつた徳川領の遠江・三河の占領こそが吊いを含めた戦役であり、その緒戦は高天神城の奪取でした。

勝頼は、遠江の完全制覇に加え徳川氏の殲滅

高天神城の歩き方 2

【A. 搦手から曲輪群へ】搦手からの急な登城路を切り切ると小さな平場にたどり着く。この辺りを境に異なる縄張り(構造)をもった東峰と西峰に分かれる。【B. 本丸】高天神城の曲輪の中で最高所にあり、最も広い曲輪。北側は急崖、南側には土塁をめぐらし、さらに的場曲輪・腰曲輪により固守されている。【C. 本丸南側の登城路】本丸から三の丸へ向かう登城路は階段状に整備されているが、南側に目をやると急崖が展開していることがわかる。【D. 井戸曲輪の井戸】籠城戦においては、水の確保は絶対不可欠であった。高天神礮層と呼ばれる古大井戸が運んだ大小の礮を多量に含む非常に硬質な岩盤に掘られている。掘削には難儀したであろうことが予想される。



武田信玄の遠江侵攻図

武田氏の侵攻は、信玄率いる本隊と、山県昌景・秋山虎繁らが率いる別働隊に分かれる。信玄本隊は、東海道を進軍し駿河から遠江へ入り、海岸沿いに進み高天神城の小笠原氏助を降参させ、見付方面へ向かった。山県・秋山別働隊は、青崩峠もしくは兵越峠を越えて遠江に入った。

※兵站：軍事上の人員・兵器・兵糧などの整備・補給等の物流全般を指す。
 ※後詰：城を包圍した敵や布陣した敵の後方から攻撃すること。

※国衆：戦国時代に登場した地方領主で、戦国大名に従属し戦国大名ほど大きくはないが、小規模ながらも独自に領域支配を行っていた。



体感する高天神城

搦手門から石段を登る
 攻め手を阻む絶壁の山
 この城を攻めるのは難しいと
 身体で感じる旅

TAKATENJIN COLUMN

1

高天神コラム ①

伝説を裏付けた大河内石窟



大河内正局が幽閉されたとされる石窟は、本丸下の北山腹にあり、その規模は奥行約2m、横幅約3mを測る狭い空間でした。西日が差し込み、冬季にはからっ風と呼ばれる強い寒風が容赦なく吹き込む、厳酷な環境でした。また、高天神礫層と呼ばれる非常に硬質の岩盤に構築されていました。大小多数の礫が露頭する天井と壁面から成る横穴は、まさに石窟もしくは石牢と呼ぶにふさわしく、その呼称が流布したものと考えられます。

平成22年（2010）の台風により石窟の上部が崩落、埋没、ただちに緊急調査が実施され、調査の結果、下層から竪穴と横穴（石窟）が発見されました。石窟の真偽については後世の創作、伝承との見解もありましたが、この発見により事実であることが判明しました。

政局は三河時代からの家康の家臣であり、家康の外祖母が政局の伯母にあたる家康の外戚関係にありました。また、家康の幼少期には近習として仕えており、敗れたとはいえ家康直属の家臣としての誇りから開城を潔しとせず、幽囚ではなく自ら石窟に籠城したとも言えます。

とする諸曲輪※に迫り、六月には堂の尾曲輪・西の丸が落とされてしまいます。高天神城の地形的特徴として北から東にかけては急崖を成しているのに対し、堂の尾曲輪・二の丸が位置する赤根ヶ谷と呼ばれる西側は傾斜が緩やかであり、そこからことごとく攻め込まれました。

勝頼は猛攻と合わせ調略※にも動き、六月十七日、小笠原氏助は武田氏からの一万貫の所領という好条件の提示と城兵の助命を引き換えに開城、高天神城は武田氏の城となりました。

「三」織田信長の援軍、間に合わず

一方、援軍要請を請けていた信長は、越前・伊勢の一向一揆との戦いに忙殺されていましたが、高天神城を救うべく六月十四日に岐阜城を発ちました。進軍途中の吉田城（愛知県豊橋市）にて落城の報を聞くこととなり、期待された信長の援軍は間に合いませんでした。

開城において城兵は、武田方に付くか徳川方に残るかは各人に任せられましたが、唯一人開城に応じなかった軍監大河内正局（政局・正房・源三郎）は勝頼の怒りを買ひ、高天神城の石窟に幽閉されてしまいました。開放されたのは、七年後の天正九年（一五八二）三月、徳川方による高天神城奪還の時でした。



武田勝頼の遠江侵攻図

武田勝頼は駿河から丸子城・田中城を経由し諏訪原城に至る東海道筋の侵攻ルートにくわえ、江尻城から船舶により小山城・滝境城・相良城へと物資を補給するルートを確認していた。諏訪原城を武田方の兵站拠点としつつ、後詰とサブ補給路を担う滝境城・相良城を背後にもつ高天神城こそが武田方に有利な決戦城であることがわかる。

※曲輪：城の内外を土塁・石垣・堀等で区画した区域。
 ※調略：内通者（スパイ）を使って敵の中心人物を寝返らせたり、降伏させたり、謀反をおこせたりするように仕向けること。

天正 1581年

高天神城を巡る攻防 | chapter 2

天正9年(1581) 徳川家康による 高天神城攻め

二 武田氏、攻勢から守勢へ

天正二年(一五七四)の高天神城奪取により遠江の覇権に王手を掛けたと思われた武田勝頼でしたが、翌三年の長篠の戦いでは織田・徳川連合軍に敗北を喫し、その敗北を境に攻勢から守勢に転じるようになります。武田氏の弱体化とみるや、家康はそれまで武田方に占領されていた城郭の奪還に動き始めます。二俣城(浜松市)をはじめとする北遠・中遠の武

の小曲輪が段差をもって重層的に連なり、明瞭な虎口(城の出入口)をもたない行き止まり構造となっています。隘路としての横堀から袋小路としての小曲輪に追い込み、行き場を失った侵入者に対し執拗な横矢※を浴びせる、まさにキルゾーン※とも呼べる徹底した迎撃構造が構築されていたのです。孤立した城郭になったとは言え、単体としての城郭の戦術的ポテンシャルは一層高くなっていたのです。



露頭した高天神礫層

高天神城の城山は、主に高天神礫層と呼ばれる古大井川が運んだ大小の礫を多量に含んだ非常に硬質の岩盤から成る。本丸下の城道には、築城の際に掘削した法面と城道の痕跡が残されている。

TAKATENJIN COLUMN 2

高天神コラム 2

天目茶碗と茶入



井楼曲輪・堂の尾曲輪等から成る西峰の曲輪群は、キルゾーンもしくは戦闘エリアとしての特徴を持っています。発掘調査では、曲輪の特徴を裏付ける興味深い発見がありました。

堂の尾曲輪の小穴から、天目茶碗と茶入が出土しました。茶入に天目茶碗を伏せた状態で、その出土状態からは明らかに人為的に埋めたものと判断されます。どのような理由でここに埋められたのでしょうか。想像をたくましくすれば、武田方の兵士が普段から愛用していた天目茶碗と茶入、日々戦闘が激しさを増し、それらを持って戦うにはいささか心許ないため、一旦穴に埋め戦いの後、掘り起こそうとしたのではないのでしょうか。しかし、天目茶碗と茶入は、持ち主に掘り起こされることはありませんでした。戦いで命を落としたのでしょうか。

奇しくも、420余年後、発掘調査により日の目を見ることになりました。使用による欠けがみられ、それなりに長く愛用されていたことがわかります。高天神城の戦いでは、多くの戦死者がありました。その多くは名も知れぬ兵士で、この天目茶碗と茶入を愛用していた持ち主もそんな一兵卒だったのかもしれませんが。平和を希求して戦いに臨み、再びこの天目茶碗と茶入を使うことを夢見ていたのでしょうか。天目茶碗と茶入は、我々に何を告げようとしているのでしょうか。



【横堀】堂の尾曲輪下の横堀・土塁

堂の尾曲輪の斜面は木々に覆われているが、斜面裾には窪地が続いていることがわかる。この長い窪地こそが横堀である。



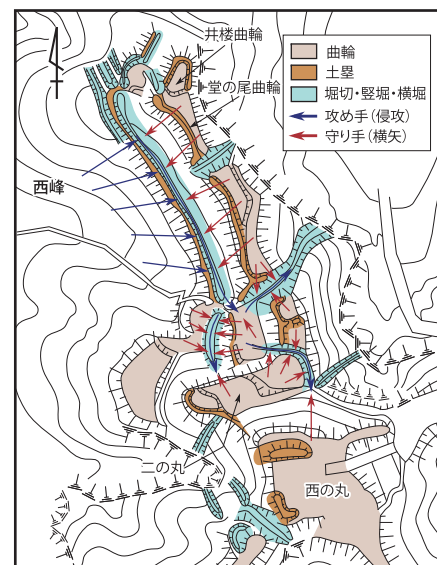
【横堀】堂の尾曲輪から横堀を見下ろす

堂の尾曲輪からは横堀が見渡せる。西峰から攻め込んだ攻め手は、否応なしにこの横堀に導かれるように動線が規制される。

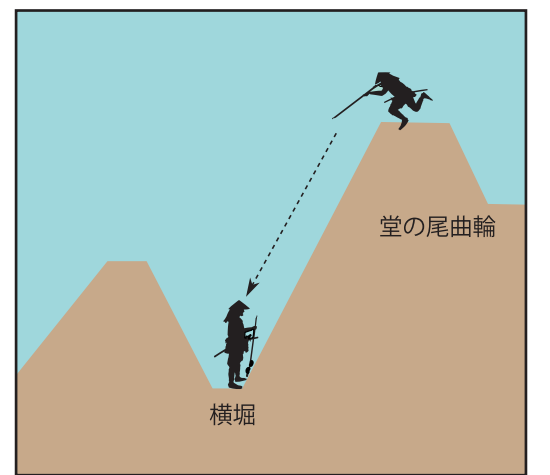
勝頼は高天神城の大改修を行っています。天正二年(一五七四)の勝頼による攻略戦では、堂の尾曲輪・西の丸・二の丸を擁す西峰から攻め込んでいます。西峰は、急崖が特徴とされる高天神城にあっても傾斜が緩やかであるため、武田方も高天神城のアキレス腱とも呼べる弱点と認識しており、ここを中心に技巧的な大改修を行いました。

二 高天神城の弱点克服、武田勝頼による大改修

田方の城郭が次々と攻め落とされ、ついには武田方の兵站拠点であった諏訪原城(島田市)までもが落とされてしまいます。諏訪原城を失うことにより、高天神城は徳川領に対峙する前線基地というより、孤立した突出点となってしまうました。



西峰から侵攻した攻め手の進路は堂の尾曲輪南下の横堀しかなく、攻め手は否が応でも横堀に誘導される。すると、堂の尾曲輪からの横矢に晒されることになる。たとえそこを突破しても縦堀に誘導され、そこでも横矢に晒される。



堂の尾曲輪南下の横堀に誘導された攻め手は、比高差12m程の堂の尾曲輪上から鉄砲・弓矢・石などによる横矢に晒される。狭い横堀内でそれらをかわすことはほぼ不可能であろう。

※横矢：側面、背後、頭上から攻撃すること。
※キルゾーン(Kill Zone)：戦場などにおいて、多数の死者が出る(と予想される)地帯。敵を仕留めるための準備がされている場所。

※横堀：曲輪を取り巻くように掘削された堀。
※土塁：敵の侵入を防ぐために、主に盛土によって築かれた堤防状の防御施設。
※堀切：尾根つたいに攻めてくる敵の侵攻を阻止できるように、尾根を断ち切った堀。

高天神城の縄張^{*}(構造)について

難攻不落、堅城を誇った高天神城。その縄張(構造)を探る。

掛川市のほぼ中央にある標高265mの小笠山から南東に張り出した丘陵末端に位置する、標高約130mの山城です。城山の周囲は、無数の小谷が入り込んだ複雑な地形を呈しており、とりわけ城の三方は急崖で、東方の丘陵裾には湿地が広がっていました。

縄張(構造)として注目されるのは、城山が井戸曲輪を境に東峰と西峰に大きく分かれ、それぞれ独立した曲輪群で構成されている点です。この構造は「一城別郭」と呼ばれ、一つの城郭の中に二つの異なる構造をもった城郭構造があることが特徴です。

西峰の曲輪群は、尾根上に井楼曲輪・堂の尾曲輪をはじめとする小曲輪が連続して配置されています。小曲輪群は堀切により分断され、さらに100mにも及ぶ横堀と土塁により堅守されています。攻め手は、堀切・横堀・土塁により攻め難いばかりか、否が応でも横堀に誘導され容赦ない頭上攻撃に晒される、迎撃構造が構築されていました。

西峰の曲輪群は狭い曲輪を連ね、堅堀・横堀・土塁を駆使した迎撃、戦闘空間として機能していました。

東峰の曲輪群は、城内で最も規模の大きい本丸を中心に中小の曲輪を階段状に連ねています。周囲は急崖と深い谷に囲まれた、まさに天然の要害の様相を呈しています。本丸と7的場曲輪の発掘調査では、掘立柱建物跡と礎石建物跡に加え、拳大の石を敷き詰めた石敷遺構が確認されました。籠城に備え、兵糧備蓄を目的とした倉庫などが存在したと考えられます。本丸・御前曲輪をはじめとする東峰の曲輪群は、削平地と土塁を組み合わせた広い曲輪による居住空間として機能していました。



7 的場曲輪の石敷遺構
石敷とは拳大の石が敷かれた施設で、倉庫跡と考えられる。



7 掘立柱建物跡・礎石建物
的場曲輪には、石敷遺構だけでなく、掘立柱建物や礎石建物もあった。



8 本丸虎口
本丸を堅守していた虎口(出入口)は、左右の土塁をずらした食い違いになっている。



9 三の丸土塁
三の丸外周には土塁が巡り、高天神城の中でも土塁がよく残されている。



10 大河内石窟
徳川方の軍監大河内正局が幽閉されたと伝わる石窟。(コラム1参照)



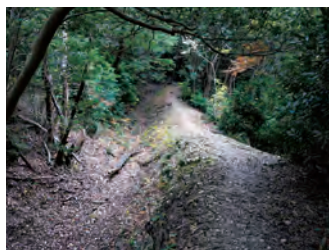
11 見張り台先端の北堀切
幅10m、深さ8mを測る巨大な堀切。斜面に沿って縦堀状に伸びている。



12 見張り台先端の南堀切
幅13m、深さ10mを測る巨大な堀切。転落の危険があるので要注意。



1 井楼曲輪台跡
城域の北西先端の高所にあった曲輪で、監視のための台を備えていた。



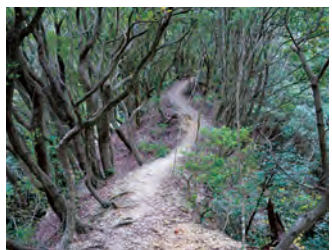
2 堂の尾曲輪の横堀と土塁
全長100mを超える横堀は、山城にあっては非常に希有な遺構。



3 袖曲輪・堂の尾曲輪の堀切
袖曲輪と堂の尾曲輪を分断する堀切で、深さは6m程あり容易には越えられない。



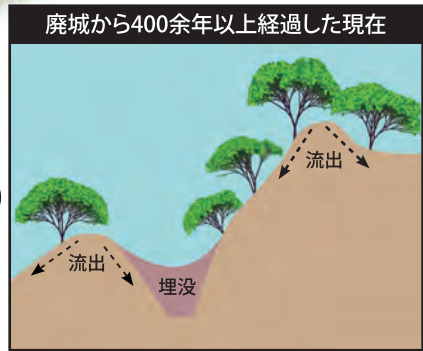
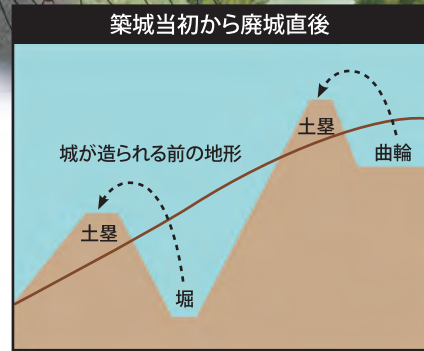
4 馬場平
馬に関する施設ではなく、番場(見張り場)が転じて馬場となったもの。



5 犬戻り猿戻り(甚五郎の抜け道)
狭く道の両側は急崖、転落の危険があるので要注意。(コラム3参照)



6 井戸曲輪
西峰と東峰を分ける曲輪。籠城には欠かせない井戸があった。



*縄張：本丸・二の丸・三の丸等の曲輪をどう配置するか、防御のための堀や土塁をどう巡らせるか等、城の全体像の設計を指す。
*堅堀：等高線に対し直角に設けられ、敵が斜面を横方向に移動するのを阻む堀。

高天神コラム ④

犬戻り猿戻り（甚五郎抜け道）



高天神城の戦いにかかる最も著名なエピソードは、武田方の軍監横田尹松（よこた ただまつ／ただとし：通称 甚五郎）の脱出劇でしょう。脱出に際しては、徳川方の旗を拾いままと徳川方の目をごまかし脱出したとか、徳川方の陣の柵を破って脱出したとの諸説あります。諸説ある中の一説に、馬場平から城外の山塊に伸びた犬戻り猿戻りと呼ばれる隘路から脱出したとされ、「甚五郎の抜け道」とも呼ばれます。狹隘な尾根筋として伸びた山道は、一人がようやく通ることのできるまさに隘路で、両側は急崖による転落の危険性をはらんでいます。犬や猿もおじけづき戻って来ってしまう程の隘路であることから「犬戻り猿戻り」の名称と呼ばれるようになりました。

脱出に成功した横田は甲府の武田勝頼に拝謁、勝頼からは労いと褒美を与えられますが、辞退しています。また、高天神城籠城衆の多くが勝頼に後詰を嘆願したのに対し、横田は戦況ならびにその後の影響を考慮した上で後詰の断念を勝頼に具申しており、高天神城の行く末を冷静に観ていたと思われる。

します。信長は勝頼の後詰がないことばかりか、勝頼が高天神城を見捨てたことで勝頼の主君としての権威失墜につながることを予見していたのです。

同年三月二十二日、万策尽きた籠城衆は、東部への脱出を図るべく包圍陣の襲撃を試みますが、城将岡部元信らをはじめ多くの武将が討ち取られました。決死の戦闘は壮絶で、累々とした屍で堀が埋まったとされます。難攻不落を誇った堅城は、その後、主を置くことなく静寂な杜に抱かれた城跡として現在に至ります。



本丸北東斜面

高天神城が難攻不落、堅城と云われる特徴の一つ、西側の一部を除きほぼ急崖に囲まれていることである。本丸北東斜面もほぼ絶壁を成し、敵兵を寄せ付けることはなかった。

「三」 人馬の往来を完全遮断、家康による完全包圍網

徳川方にとっては、勝手知ったる城郭とはいえ、城造りにおいては一枚も二枚も上手な武田方の城郭として、戦術的ポテンシャルが高くなっているだろうことは容易に予測されることでした。そのため家康は、慎重かつ執拗な包圍作戦を展開することになります。

まずは奪還の拠点として高天神城の西の馬伏塚城（袋井市）を修復、その南東に「岡崎の城山」（袋井市）、さらに南進した沿岸部に新たに横須賀城を築城、各城郭間の船舶による兵站ルート強化しました。

天正五年（一五七七）には、掛川城から高天神城への間道※の押さえとして、かつて掛川城攻めに用いた小笠山砦を改修します。遺構として残る長大な横堀からも改修規模の大きさがわかります。

さらに天正六〜八年（一五七七〜一五七九）にかけて、高天神城包圍網を代表する六砦（小笠山砦・中村砦・能ヶ坂砦・火ヶ峯砦・獅子ヶ鼻砦・三井山砦）をはじめとした二〇カ所にも及ぶ城砦群により、高天神城への補給路遮断を徹底しました。さらに高天神城の周囲に堀と土塁をめぐらし、柵を幾重にも設けたとさ

れ、その有無の真実は定かではありませんが、包圍の徹底ぶりを示す逸話として伝わっています。（P1イラスト参照）

「四」降伏却下、籠城衆の非業の最期

対する武田勢は、天正四年（一五七六）以降、同七年まで六回にわたり出兵しますが、重要な兵站基地であった諏訪原城（島田市）を失っていたため、同地域に長期間軍勢をとどめることができず、徳川攻圍作戦の影響をじわじわと受けることとなります。

さらに勝頼には、高天神城に注力できない原因がありました。越後の上杉氏の家督争い（御館の乱・景勝と景虎「北条氏康の実子」の争い）において、景勝が勝利、勝頼は景勝と同盟を結んだことにより北条氏との同盟が決裂してしまします。武田氏にとって、駿河・伊豆方面での北条氏との新たな対立により、高天神城の後詰を諦めざるを得ない状況に追い込まれていました。高天神城内においても、後詰に対しての意見の不一致もあつたとされ、最終的に高天神城は見捨てられたのです。

天正九年（一五八一）正月、籠城衆は後詰の来援を諦め、徳川方への降伏の申し入れをします。ところが、家康と信長は申し入れを拒否



徳川家康による高天神城包圍網図

家康は高天神城の包圍にあたって、六砦をはじめする城砦群による包圍と、馬伏塚城→岡崎の城山→横須賀城の兵站ルート構築をはじめとする、遠江の北から南にかけての城郭間ネットワークを強化した。

「エピソード」

戦国史に残る攻防が繰り返された高天神城でしたが、天正九年（一五八一）、家康が奪還すると、その後間もなく高天神城は廃城となり、歴史上の表舞台からは姿を消してしまいます。守り易く攻め難く、加えて迎撃性にも優れていた高天神城でしたが、三河・遠江・駿河の三国を手中にした家康にとっては、もはや高天神城の戦略上の意味は無くなってしまったのです。

遠江平定の足掛かりとしては重要な駒でしたが、勝敗が付き不要となれば後は捨てるだけの駒でした。おそらく家康は、最初から高天神城を廃城にすることを考えていたのでしょう。徳川氏にとつても、武田氏にとつても必要不可欠な城郭であったことは間違いありません。両者にとつてそれぞれの次のステップへの進出が決まる城郭でしたが、勝敗が付き、どちらかが完全に手中に収めた段階で戦略価値と存在価値は一気に下がってしまったのです。

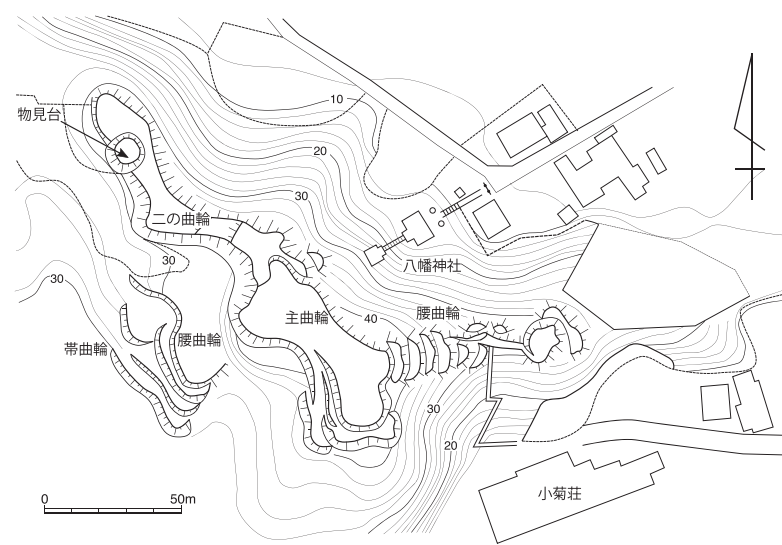
その一方、横須賀城には城主を置き城郭として存続させました。当時の横須賀城は、湊を擁した船による大量物資の輸送を可能とする物流拠点としての城郭でした。高天神城のように高い戦術性だけでなく、物流拠点としての経済的側面が城郭にも求められる時代へと移り変わりつつあることを家康は十分理解していたのです。

※間道：主要道から外れた道。脇道。抜け道。

特別付録 戦国資料

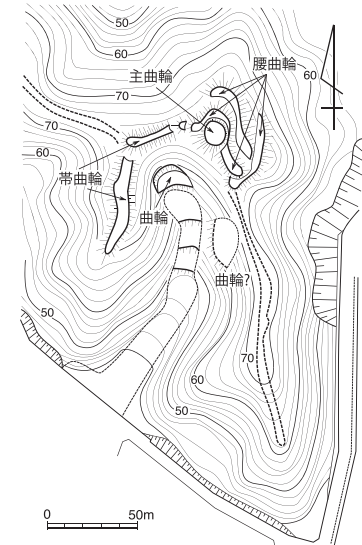
高天神城六砦について

徳川家康は、武田方の高天神城を奪還するために、徹底した高天神城包囲作戦を展開しました。六砦（小笠山砦・中村（山）砦・能ヶ坂砦・火ヶ峯砦・獅子ヶ鼻砦・三井山砦）をはじめとし、20カ所にも及ぶ砦群の築城により、武田軍の監視とともに高天神城への兵糧・物資補給の遮断を徹底しました。



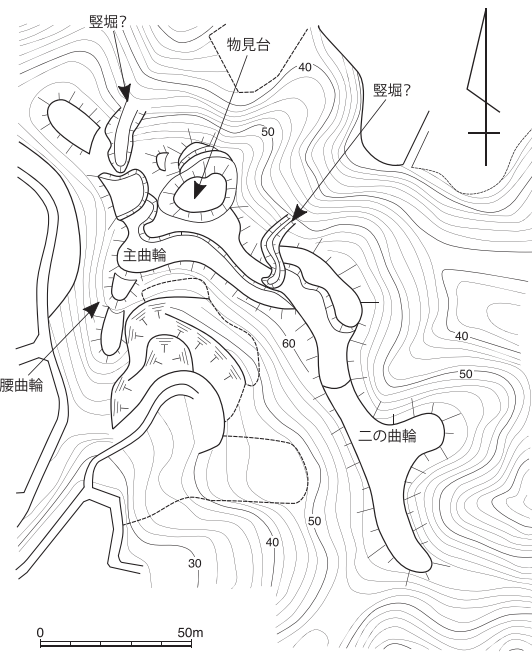
高天神城の東約3kmに位置する。標高400m程の半島状に伸びた丘陵先端を砦城としている。物見台・曲輪・腰曲輪が比較的良好に残されている。

獅子ヶ鼻砦 (掛川市大石)



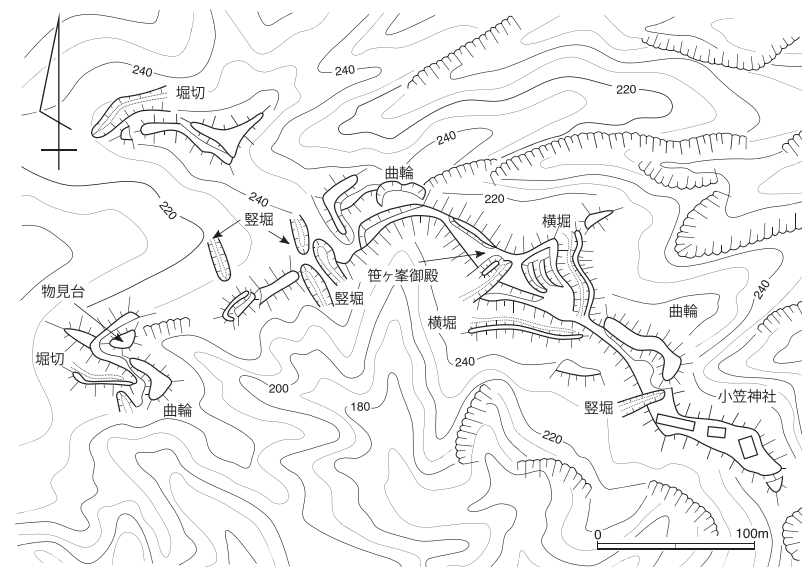
高天神城の北東約2kmに位置する。小貫と土方地区の境あたり、元々番所が置かれていたと云われる。標高80m程の丘陵にあり、削平により残存状態は悪いが、曲輪・腰曲輪が確認できる。

能ヶ坂砦 (掛川市小貫)



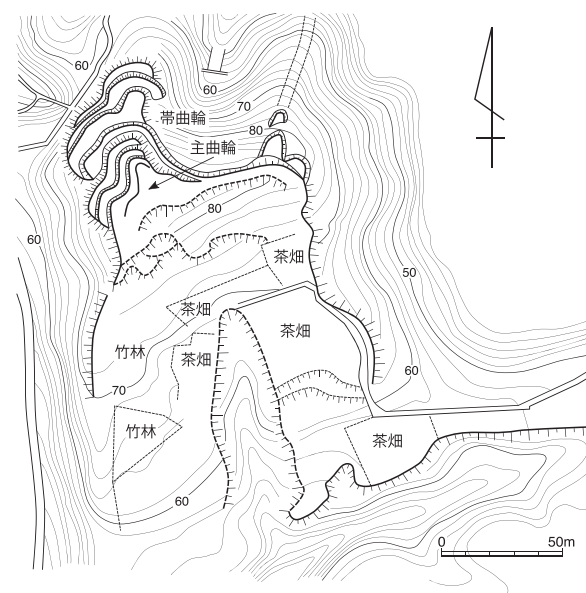
高天神城の北東約1.5kmに位置する。位置については二説ある。その内、東砦は比較的良好に遺されており、頂部の物見台を中心とした主曲輪のほか、腰曲輪・堅堀が残されている。

火ヶ峰砦(東) (掛川市中方・下土方・岩滑・中)



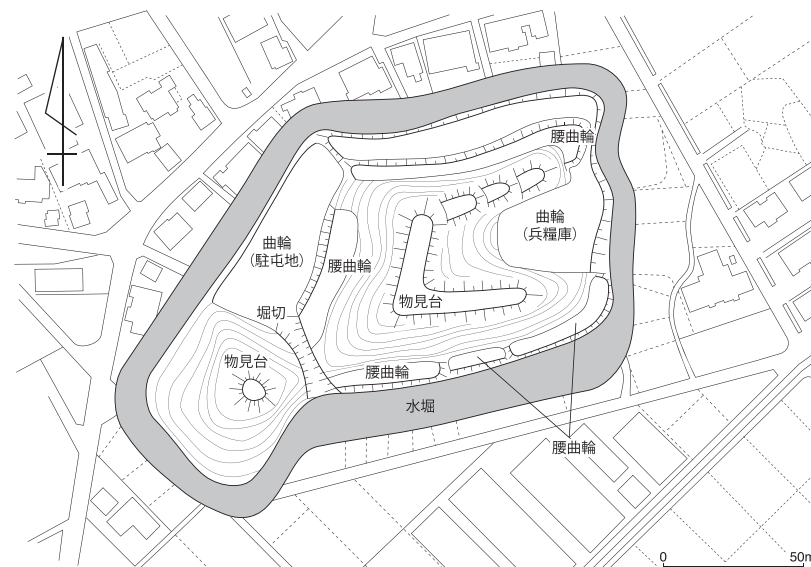
高天神城の北方約4kmに位置し、標高350m程の小笠山山頂付近に築かれている。徳川家康は、永禄十一年(一五六八)の掛川城攻めの際に構築し、天正九年(一五八二)の高天神城の戦いに際し改修している。家康が布陣したとされる笹ヶ峯御殿をはじめ兵士が駐留したであろう曲輪が残る。堀切・土塁のほか大規模な横堀は圧巻。

小笠山砦 (掛川市入山瀬)



高天神城の南方約3kmに位置する。小笠山から南へ伸びた標高95m程の丘陵先端にあり、平野部に加え遠州灘まで望める。南部は茶畑により開墾されているが、北部頂上部付近には階段状の曲輪が残る。

三井山砦 (掛川市大坂)



高天神城の南東約3kmに位置する。標高300m程の独立丘陵で、南側は入江となっており、砦の周囲は水堀となっていた。二カ所の頂部に物見台を設け、その頂部を仕切るように堀切がある。水堀と入江(小河川)を利用した、物資の搬入・搬出を目的とした砦。

中村(山)砦 (掛川市中)

六砦をはじめとする城砦群による高天神城包囲

城攻めにおいて、砦(陣城)と呼ばれる簡易かつ臨時的に築いた比較的小規模な城郭を包囲するように配置し、籠城側を孤立させる戦法が戦国時代に用いられました。とりわけ戦国時代後半には頻りに用いられ、高天神城包囲においては、大小20にも及ぶ砦が築かれました。さらに高天神城包囲においては、中村(山)砦のように周辺の小河川や湿地を利用した水運、すなわち物資搬入搬出を目的とした砦、獅子ヶ鼻砦、三井山砦や小笠山砦のように間道をおさえる砦、その他の監視を主とする砦等に機能分化が進んでいました。機能分化した包囲システムにより、スムーズな物資輸送と兵力の補充と交代が容易となったことで、家康は長期包囲戦を有利に進め高天神城の奪還につなげました。

